


IIAS NEWSLETTER

International Institute for Advanced Studies

November 2003

35

 財団法人
国際高等研究所

index

本記

『高等研・開設10周年記念事業 報告』

記念講演会の開催報告

学術講演会

『創造的な誤解はありうるか？
異文化交流の場合』

ジャック・ブルースト

仏国モンペリエ・ポール・ヴァレリー大学 名誉教授

ニュース・掲示板

文化勲章受章者及び秋の叙勲受章者

11月の予定



『高等研・開設10周年 記念事業 報告』

開催日時 2003年10月25日 / 土曜日
会場 高等研レクチャーホール

高等研では、研究所開設10周年の記念事業として、好天に恵まれた10月25日(土)に、同研究所レクチャーホールで「研究事業の総括・報告会と学術講演会」を催し、多彩な研究事業の展開についての意見交換などを通じ、アカデミズムの拠点としての使命を貫いていく誓いを新たにしました。

1984年8月の財団法人創設以来協力を受けた学界、産業界、行政などの関係者を中心に、研究所顧問の沢田敏男京都大名誉教授、熊谷信昭大阪大名誉教授、米花稔神戸大名誉教授ら約100人が出席。まず、新宮康男理事長が「人類の未来と幸福のために何を研究すべきかを

研究する、という世界的にもユニークな当研究所の活動は、多くの方々のご協力を得て、さまざまな分野で高い評価を受けるような成果を生みつつある」と報告して、関係者の協力を謝意を表わすとともに「効率化優先という一般社会の風潮のなかで、高等研設立の理念を思い起こし、焦らず騒がず、10年先、20年先を見据え、じっくりと、学問の王道を極める研究を進めてまいりたい」と、力強く挨拶した。

祝電披露のあと、野村一雄専務理事(7月就任)と新井輝隆常務理事から、『財団運営の現況報告』があった。「研究支援の組織は、事務局長以下12人の常勤職員で、研究活動の活性化に伴う事務量の増加や出向職員の一

部引上げ等厳しい状況にあるが、関係企業からの支援、職員配置の見直しや事務処理方法の改善など効率化で対処している」「運営資金は、研究活動に直接関わる費用と、研究所の管理運営のための費用に大別される。前者は、文部科学省の『科学研究費補助金』を主財源に、今年度の予算総額は約6千万円。後者の主たるものは、職員の人件費及び施設の維持費で、年間約2億円を必要とし、基本財産などの運用益と施設利用料などの雑収入でまかなうこととなっているが、超低金利等の影響で『約5千万円の赤字予算』を組まざるを得ない状況にある。今年度もあと半年、出来る限りの経費削減で、赤字幅の圧縮に努める」「基本財産については年利率4%弱、運用財産については年利率6%での運用を見込んでいるが、最近の円高など条件がますます厳しくなっている。資産運用基準を遵守し、より慎重に資産運用を行いたい」などと野村専務理事が報告・説明した。なお、「赤字予算ではあるが、研究活動には支障がないように十分に配慮する」と強調した。

このあと、草木良子研究事業部長が、永年勤続表彰を受けた。

続いて、北川善太郎副所長の司会による「研究事業の総括と現況報告」に移り、まず、金森順次郎所長が、スライドを駆使して、約30分にわたり、高等研の目指す研究課題や、研究活動を取り巻く環境、運営の組織、事業の性格、世界的に類のないユニークで多彩な研究活動の中身などを紹介した。

「高等研は人文・社会・自然の諸科学にまたがった総合的な研究をする場で、企画委員会で練った独創的なテ



講演を聞く参加者

ーマについて、未来を拓く“新しい概念”の創出を目指した研究を進めている。原則的には専任の研究者は置かず、所外の英知を結集して異分野の交錯に重点を置いた『研究プロジェクト』（今年度は15研究班）を順次、立ち上げて運営しており、研究プロジェクトの推進に際しては、各プロジェクト間の連携に配慮している。また、毎年度、国内外から十数人の優れた研究者を招き、自由な発想で個人研究をしてもらう『フェロー制度』の充実や、研究成果の公表を中心とした学術出版事業の充実、学術的・社会的要請の強い分野におけるスペシャリスト養成事業、国際交流事業など研究事業の展開を図っている。なお、北川副所長が主宰した特別研究『情報市場における近未来の法モデル』では、氏の提唱する『コピーマート』の概念を核にすることで、学術情報システムの構築へと展開することができた。また、「親子サイエンス・スクール」事業（年1回、小学5、6年生が対象）も好評裡に定着しており、多角的に、多彩な成果が出てきている」。

このあと、会場との熱心な意見交換が行われたが、そのなかで「大学等の研究者が短期滞在して研究に専念する“ミニ・サバティカル”制度の創設につき、関係筋に協力を呼び掛けている」と金森所長が披露した。

記念日にふさわしい「学術講演会」は、今年度フェローの一人であるジャック・ブルースト氏（モンペリエ・ポール・ヴァレリー大学名誉教授）の講演「創造的な誤解はありうるか？ - 異文化交流の場合」（司会・通訳：中川久定副所長）で、誤解が異文化に創造性を与えるという文化交流の機微の面白さに触れることができた。（講演要旨は次頁）

最後に、コミュニティーホールで、立石義雄副理事長のあいさつ、沢田敏男前所長の乾杯の発声に引き続き和やかなムードのレセプションが行われた。

（文責・事務局）



金森所長による研究事業報告



記念講演会

『創造的な誤解はありうるか？ 異文化交流の場合』

講師
ジャック・プルス

Jacques Proust

(司会・通訳:中川久定副所長)

仏国 モンペリエ・ポール・
ヴァレリー大学名誉教授
2003年度フェロー

【フランス文学・欧日比較文化史】

開催日時 2003年10月25日 / 土曜日

会場 高等研レクチャーホール

ある生体に異物がとりこまれると、それが有益に働く場合もあれば、逆に有害に働く場合もある。異文化間の「誤解」についても同様で、「誤解」がその国固有の文化自体を攻撃することもあれば、逆に、完全な誤解でありつつ、そこから、生産的な結果が生まれてくることもある。アメリカの18世紀研究者、ローバート・ダントン氏のいう「誤解の創造性」という観点から、16世紀の半ばから18世紀末までの日本とヨーロッパを見てみたい。

異文化間の「誤解」といえば、13世紀ヨーロッパにその代表例が見られる。すなわち、トマス・アクイナスの著書「神学大全」(1266~67年)である。その内部には、アクイナスのラテン語本文のうちに、アリストテレス(ギリシャ語)のアラビア語訳(アヴェロエス)、あるいはヘブライ語訳(マイモニデス)から、さらにもう一度ラテン語に重訳されたものが渾然と統合されていて、いわば一種の誤解の総合体ともいうべきものを形成していたからである。西洋と日本の間では、当初は、誇大宣伝とか、故意にゆがめられた意見とかによる誤解が支配的だった。訪欧した天正遣欧使節(1582年~90年)の若い侍たちは、民衆の貧困さを見ずに、訪問した諸国の宮廷の印象だけで、理想化した西洋像を日本にもたらした。また、日本にきているカトリックの僧たちも、布教の成功をヨーロッパに誇示する意図からか、日本をパラダイスのように伝えていた。1552年に書かれた「世界の驚異」という本に、「日本の仏教徒がいう釈迦というのは、実はイエスのことである。イエスである釈迦を信じている日本人は、したがってすべてキリスト教徒である」というような、驚くべき記述がある。

「誤解」が生じる、大きな原因の一つに、言語がある。来日したフランシスコ・ザビエルは、説教には日本語を使い、「神」「大日」「救い主」「仏」「悪魔」「天狗」などと置き換えたが、のちの宣教師たちは誤りに気づき、基本的な用語は、ラテン語かポルトガル語を使うことにした。そこから、一種の「混血語」とでも称すべきものが生じた。

この種の「誤解」の出会いを、17世紀の医学、天文学、絵画の3分野に絞ると。

ヨーロッパ諸国で宗教的正統派が揺らぎつつあった地



講演するプルス氏(右)と司会の中川副所長(左)

方に生まれた「最先端の医学」が、蘭学書の翻訳を通じて日本に入ってきた。日本人は、書物の持つ宗教的意味など眼中になく、ただ解剖図とか外科手術の図とか、医学語彙などに関心を示した。が、いずれも、日本の医学に大きな革命をもたらすものばかりで、翻訳作業に「誤解」も存在していたが、創造的働きをしたことも事実である。技術的な医学語を日本語に置き換えなければならず、漢字の持つ語源を活用して、新しい「医学用語」を作り上げた。こうした新しい用語によって、日本の医学は、中国医学の伝統から距離を置くことができた。それは、ちょうど、ヨーロッパのルネッサンス期に、ヨーロッパ人がギリシャ語とラテン語の語源を基にして、新しい医学用語を作ったのに似ている。

一方、ヨーロッパへ移入した「中日医学」(和漢医学)は、その神髄を理解されなかった。ヨーロッパ人は「中日医学」の経絡図を見て、血管経絡図、あるいは神経経絡図であると誤解してしまった。それゆえ、人間の肉体組織について、こんなにでたらめな理解をしているにもかかわらず、「中日医学」の針・灸療法に、はっきりとききめがあることを知って、理解に苦しんだ。

日本に密入国した宣教師であるクリストヴァン・フェレイラが、他の宣教師の書物から書き抜いて「乾坤弁説」を作った。この「本」は、日本でよく読まれたが、内容は古く、コペルニクスの「地動説」やコペルニクス説のガリレイによる実験的な確証が、一般に広げられるようなことはなかった。

ただ、ここでも翻訳者は言語学的な悩みに直面した。他方、ヨーロッパより古代にさかのぼる中国の年代記を知ることによって、ヨーロッパの啓蒙思想家は聖書の年代記を疑問視することになった。

また、ルネサンス以後の西洋絵画が日本にはいり、風景画における遠近法が日本画に創造的な影響を与えた。逆に、遠近法のない日本版画がヨーロッパ画壇を刺激した。特に、ゴッホは、広重の版画からコピーを作っている。いずれも西洋的遠近法を無視した新しい画面を創造することに成功している。ゴッホ自身は気づいていないが、実は、日本の芸術家によって自由に解釈された、西洋の絵画の源流に戻

った、といえる。

逆説的に結論づけると、西洋人にとっても、日本人にとっても、革新を有利にするのは「原理が不明だった」からである。異文化交流において、「誤解」というのは、本質的なものだ。送り手、受け手の意図だけではいかんともしがた。有害だったり、創造的だったりするのは、偶然的な状況あるいは周辺的な状況だ。発信者が重要だと思っていることが相手にとって必ずしもそうではない。このことは、送り手を謙虚にし、受け手を自由に振舞わせるような結果を生む。

(文責・事務局)

ニュース・掲示板

文化勲章受章者及び秋の叙勲受章者 (敬称略)

本年度「文化勲章」及び「秋の叙勲」受章者の高等研関係者は下記のとおりです。

文化勲章

・西島 和彦 (1998年度高等研フェロー・仁科記念財団理事長)

旭日大綬章

・奥井 功 (高等研理事・関西経営者協会会長)
・辻 義文 (前高等研副理事長・元経済団体連合会副会長)

瑞宝大綬章

・和田 光史 (高等研企画委員・九州大学名誉教授)

旭日中綬章

・阪本 道隆 (高等研理事・奈良商工会議所会頭)

11月の予定

研究会 2003年11月

日(曜日)	プロジェクト名	研究代表者 / 講演者
1日(土)	分化全能性	原田 宏
5日(水)~ 7日(金)	「量子情報の数理」国際シンポジウム	大矢 雅則
7日(金)~ 8日(土)	東西の恋愛文化	青木 生子
8日(土)	スキルの科学	岩田 一明
14日(金)~ 15日(土)	21世紀の宇宙開発・宇宙環境利用の問題	木下 富雄
18日(火)	IIAS-JICA共同研究会「産学連携」ミニフォーラム	北川 善太郎
18日(火)~ 20日(木)	京都大学数理解析研究所との共同研究ワークショップ	斎藤 恭司
26日(水)~ 28日(金)	「磁場が誘起する磁性体の新量子現象」フェローシンポジウム	本河 光博
28日(金)~ 29日(土)	思考の脳内メカニズム	波多野 諒余夫

講演会 2003年11月

15日(土)	公開講演会「多様性の起源と維持のメカニズム」	吉田 善章 (東京大学教授)他6名
29日(土)	公開講演会「ミクロからナノへー先端材料を目指す新物質開発」	新庄 輝也 (IIASフェロー / 京都大学名誉教授)

編集・発行者

財団法人 国際高等研究所

〒619-0225 京都府相楽郡木津町木津川台9丁目3番地
TEL : 0774-73-4001 FAX : 0774-73-4005
E-mail : www_admin@iias.or.jp
<http://www.iias.or.jp>